End,end,and..... .

朝凧砂砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End , end , and

【Nコード】

N0940N

【作者名】

朝風砂砂

【あらすじ】

環状の城壁により外界からの災厄から守られた街に人々は生き
ている。ある日、全十三ある環状城塞都市群の内、第七環区に住む
クレハコミチ 暮箱道を異変が襲う。

突如消失した五十万もの第七環区の住民。ミチを襲う白亜の怪物。
そしてそれを容易く駆逐した双子の姉妹。

ミチはその双子の姉妹の協力を得つつ、離れ離れになった姉に再

会を果たすため、第一環区を目指す。

序章

目を覚ます。

仰向けに眠っていたようだ。背中 of 床の感触が痛い。

「あれ？　なんで俺、こんなところで寝てんだろ？」

上半身を起こした暮箱道は床に寝ていたせいによる痛みクレハコミチに背中をさすりながら辺りを見渡す。そこは何の事はない自宅のリビングだった。

すぐ脇にソファがあるのにわざわざ床で寝ていたのは何故だろうか。眠る前の記憶が一切ない。言っておくが俺は未成年だ。酒は飲んでいない。更に言っておけばこれまでの人生において一滴たりとも酒を飲んだことはない。また更に言っておけば酔いつぶれるまで酒を飲むような悪友も持ち合わせていない。

ミチは軋む体を右腕で支えながら起こす。やけに静かだった。シン、としている。まるで音という音が聞こえない。いや、正確に言えば正面壁の上部に掛けられた時計の秒針が刻む規則的な音は聞こえている。だからこそ、普段は他の音にかき消されているはずの秒針の音が妙にはっきりと聞こえてくるのが暮箱を不安にさせた。雑音が聞こえない。

「なんだよ……一体」

鮮明にリビングに響く眩き。時計が指す時刻は十時。外は明るいから、午前の。

「そうだ。姉貴、は友達ん家か」

唯一の家族で三つ年上の二十二の姉は一昨日から隣環区の友人の家へ外出中であつたことを思い出す。どうやらここで眠る直前の記憶がすつぽ抜けているだけで、他の記憶は無事らしい。

後頭部をぼりぼり搔いてから、歩を玄関へ向ける。そして扉を開くと……。

ミチはゾツとした。

「誰も居ないじゃん」

自宅を出て目の前に広がる大通りには人っ子一人居なかつた。誰も、いない。通り中央を走る路面列車も向こうで停止しているのが見える。列車が止まっているそこは駅ではないし、緊急事態か何かが無ければあんな場所では止まらないはずだつた。

緊急事態。その不吉な単語が妙にミチの頭を席卷し始めた。

何かが、あつたのかもしれない。

この第七環区城塞都市で。全十三環区ある内、最も人口が多いこの第七環区で、何かが。

半ば通りに出かけていた身を翻し、玄関の扉を叩き開け、再度リビングへ戻る。

テレビだ。この第七環区城塞都市で住民全員が避難しなければな

らない事態が起きたのならば、絶対にテレビで何らかの情報が……。

サツと血の気が引くのを感じた。一瞬視界が白んだような気さえした。

画面に映し出されたのはいわゆる砂嵐。ザーザーとテレビの画面が嵐の如く荒れている。その変に大きくて不気味な砂嵐の音が、ミチの不安や焦りを一気に恐怖へと変えそうになる。

「どづいつことだよ、これ」

どのチャンネルも砂嵐かブラックアウト。テレビ局はここ第七環区から最も遠い第十環区にあつたはずだ。

だとすれば……、だとすれば一体どづいつことだ？意味が分からない。どの環区にも人が居ないということか？いや、断定は、出来ないよな。いやいや。それよりも俺はまず何をすれば良いのか……。

「そうだ。姉貴は大丈夫かな」

確か姉貴が泊まっている友達の家電話番号を携帯に入れといたはずだ。俺は別に要らないと断つたが、姉貴が念のためだと言って無理やり登録していたっけ。一昨日の昼の事だ。ちなみに姉貴は携帯を持っていない。

電話帳から姉貴が泊まっているはずの家の番号を選ぶ。すぐに呼び出し音が鳴り始める。そしてすぐにそれも終わり、

「あ、もしもし。あの暮箱ですけど、そちらに姉は居ますでしょうか？」

相手がちゃんと電話に出たか確認もせずによく立てるように話し出したために、向こうが留守電であることに気づかなかった。

『もしもし？ミチ？私、お姉ちゃんだけだ。そっちは無事？』

やっと聞いた人の、いや姉の声に一気に胸を撫で下ろすミチ。こっちは無事だ、と言おうとすると何やら焦燥を感じる姉の声が再び受話器から聞こえてくる。

『あのね、よく聞いて。今そっちがどうなっているかは分からないけど、たぶんこっちと同じ状況になると思うわ』

「姉貴？ちよつと待って。同じ状況って？そっちは今そつなっ」

『とにかく外には出ないで。家の中に居て。たぶんそっちにも助けが行くと思うから。絶対に自分から外に出ちゃ駄目よ。良い？』

留守電だ。俺が話しているのを無視して姉貴は話している。その声からはかなり焦っている事が伝わってくる。本当に一体何があったんだ？外に出ちゃ駄目？何故？助けが来る？どういうことだ。

受話器越しの姉貴の声はまだ続いている。

『おばさんが……その、亡くなったの』

背筋に悪寒が走る。

おばさんとは宿泊先の友達の母親のことだろうか。でも何故。

『怪物が、真っ白な怪物がおばさんを』

姉貴の声が震えている。怪物つて、一体……。

『見たことも無い、真っ白な怪物が。……ミチ？奴等とても大きくて凶暴よ。もしそつちでその怪物を見かけたら、隠れて。お姉ちゃんすぐにそつちへ行きたいけど、私一人が勝手に行動したら友達にも助けに来てくれた人たちにも迷惑を掛けちゃう。すぐに第七環区にも救助部隊を送ると言っているから、大丈夫。家の中で静かに待っていて。それまで、死なないで。ミチ』

姉貴が震えた声でそう言い終わった後、『さあ。あなたも早く』と男の声が姉貴の避難を促しているのが聞こえた。おそらく俺が眠っている間に何か起きて、電話に出なかったから姉貴は留守電にメッセージを残したんだろう。それも避難しなければいけないギリギリに。

人が死んでいる。救助部隊。避難。怪物。白い怪物。真っ白で、大きな怪物。人を、殺す？……どういう、ことだ。あの留守電の姉貴の声音からして冗談を言っていたとはとうてい思えない。第一、姉貴はあんな冗談は言わない。それに受話器越しに騒々しい感じが伝わってきていたし、避難していたためか。真っ白な怪物から？

リビングの窓越しから外を見やる。庭のせいで大通りを見渡すことは出来ないが、そこに人気は一切感じない。誰ひとりとして居ない。

居ない？

ミチはふと最悪の事を考えた。

もしかしたら既に救助部隊はここへ来て、今はもう住民を避難し終えた後なのではないかと。

俺は取り残された？寝ていたから？そんなバカな。

ミチは先ほどテレビの前で感じた物より更に強く血の気が引くのを感じた。

まずいまずいまずい。取り残されたかもしれない。いや、待て。姉貴がさつき留守電で言っていた。家の中で静かに待っていると。他の住民もそうしているのかも。だから通りにも人が居なかったのかも。

そう考えたミチはすつと立ち上がった。誰でもいい。人に会って安心を得たい。その一心で、ミチは再び外へ駆け出した。姉の『家の中で静かに待っていて』という忠告を忘れて。

すぐ隣の家の玄関の扉を叩いた。何度も何度も。だが返事は無かった。一層募る取り残されたかもしれない不安と恐怖。耐えられなくなったミチは扉の取っ手を掴み、引いた。

大通り同様、シンと静まり返っている。

分かる。この家には誰も居ない。

「本当に俺、取り残された、のか？」

ミチは絶望と不安が入り混じった歪んだ自嘲の笑みを浮かべ、その場にへたり込みそうになる。

いや、他の家には人が居るかもしれない。

そんな淡い希望にすがり、辺りの家という家、大通りを挟んで軒を連ねる店という店を探した。が、誰も居なかった。誰も……居ない。自分しか居ない。

そのことから、取り残されたかもしれないという仮定は、事実であると確定されてしまった。

誰かを探しつつづけて、何軒周ったか覚えていない。今、ミチが力なくへたり込んでる玄関も見ず知らずの他人の家だ。扉は開けっ放しで、閑散とした大通りと向かいの商店街を伺える。

数分が数十分そうして考えていた。取り残された以上は、自分でここから脱出しなければ、と。やや考え、ここはやはり、全十三環区の中核である第一環区城塞都市へ向かうのが最良だろうという結論を出した。

第一環区には軍や政府の施設が密集しているのだ。そして有事の際は最終避難場所にも指定されているシェルターがあることは全十三環区に住む人々の常識だ。

そこでなら遅かれ早かれ姉貴にも会える。そう思った。

姉貴は救助が来るまで家に居ると言っていたが、おそらくもう救助部隊は来ないだろう。来るとしても、おそらく時間が掛かる。住民の名簿と生存が確認出来た人を照らし合わせて、不明の住民が居たらまた救助部隊を送るという手はずを取るのだろうか？ だとしてこの第七環区には五十万人の住民が居る。その中から生存不明の俺の名が出るまでどれほど時間が掛かることか。

姉貴が言っていた白い怪物のことは気に掛かるが、隠れながら進めば何とかなるだろう。

そこまで考えが纏まり、一旦自宅へ戻り準備を整えようと立ち上がる。そして外へ出たところでミチは異質な存在感をはっきりと感じた。

「っ!？」

白い怪物はへばり付いていた。住宅が密集する側とは逆の、大通りを挟んで立ち並ぶ商店の内、衣料品を扱う店の看板に。怪物は張り付いていた。明確な殺気の切っ先をミチに向けて。

第1章 白亜の巨人と双子の少女

あー。あれが姉貴が留守電で話していた怪物だ。真っ白で、大きくて、凄まじく凶暴そうだ。現に今、奴は俺を睨みつけている。とは言っても、どうやら目は無いようだ。ここから見る限り、奴の体躯は人のそれにとても似ている。

二本の腕と脚。胴体。目鼻や髪は確認できないが、口はあるらしい頭部。だが、それら全てのパーツというパーツが大きい。大の大人を三人分纏めたかのような極太の腕と脚。引き締まったボディ。そのどれもが真っ白だ。そして最も目をくぎ付けにされてしまうのが、口だ。

後頭部まで裂けてしまっているのではないかと思ってしまうほど巨大な口腔が俺に向けられている。頭部に目や鼻等の人にあって然るべきパーツが無いために余計にその口が印象的で不気味だ。地面に向かって垂れつづけているのは恐らく唾液。奴の直下にはその水溜りが出来上がっている。

高さにして約五メートル。

白亜の巨人は、衣料品店の看板にへばり付き、ずっと俺を睨みつけている。目は無いから、何とも言えないが俺を認識しているのは確かな気がする。

「なんで……襲ってこないんだ？」

俺はジリジリと後ずさりを始めていた。意識的な行動ではなく、潜在的な本能に拠るもの。依然奴は俺に巨大な口腔を開き、威嚇の

ような行動を見せているだけだ。

「今のうちに」

いくら襲ってこないとはいえ、奴の真下を何事も無かったかのよう
に素通りする事は危険極まりない。とりあえず、さっきまで絶望
に浸っていた他所さまのお宅に再度お邪魔になることにしよう。

ジリジリと後ずさる。奴と自分の距離が縮まるにつれ、緊張感が
増す。

あと少し。あと少しで家の中に。

後ろ手に玄関の取っ手に手を掛ける。だが視線は白い怪物にくぎ
付けた。奴を視線から外してはいけない、そんな気がしていたのだ。
扉を引く。そつと。しかし……。

ガチャリ。

そんな玄関らしい玄関の扉を開く音が妙に響いた。一切の雑音が
消えてしまった今の第七環区にとってはとてつもなく大きな音に聞
こえた。

「や、べ」

背中に冷たいような熱いようなジリジリとした波が走る。

一瞬、俺は視線を白亜の怪物から外し、粗相をしでかした扉を引
いた左手の方に向いてしまった。

「っ！？」

直ぐにミスに気づき、怪物の方を見やる。

「いないっ！？」

次の瞬間、頭上に異様な圧力を感じたかと思うと、俺の目の前にあの怪物が姿を現した。

「なっ」

先ほどまで怪物がへばり付いていた看板とここまでの距離はおよそ三十メートルはある。そこからここまで跳んだということか！？

見れば例の看板の支柱は中ほどから派手にひん曲がっている。恐ろしい脚力だ。

ミチは尻餅を突きかけたが、ふんばりなんとか家の中まで駆け込み、土足のまま廊下に倒れこんだ。

「くそっ」

白亜の怪物は俺を捕らえようと、巨躯を玄関に突っ込み、大木のような腕を伸ばしてくる。

バキバキと玄関の枠が破碎される音が耳を満たす。

「うわ、うわっ」

ミチは情けない声を上げながらも必死に手足で床をかいてそれから逃れる。抜けかけた腰を起こし、正に死に物狂いで他人の家を土足で駆け回る。二つ階段を駆け上がり、目に付いたドアを乱暴に開けてなだれ込むようにして入る。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

激しく息が乱れる。思考が錯乱し、顎が震える。

こんな風な悪夢を見たことはあるが、これは夢じゃない。その身に刻み込まれた恐怖がそう囁く。

ふと姉が言っていた言葉を思い出す。

『おばさんが、……亡くなったの』

おばさんは怪物に殺されたと姉は言っていたが、正直あの時は実感が湧かなかつた。当たり前だ。怪物なんて……これまでに人間よりも大きな生き物を見たことも無いのだ。実感が湧くはずも無い。だが今なら、誰よりもよく分かる。

あの怪物は人間を殺す、と。

生まれて初めて、俺は人間以外の生き物を見た。怪物は城壁の外から来たのだらうか。城壁の外には様々な災厄が満ち満ちていると小さい頃から言い聞かされてきたが、怪物もその内の一つなのか。

人に良く似ているが、どこまでも人とはまったく異質な化物。

そうだ。奴は化物だ。よく小さい子供を誡めるための絵本に出て

くるような突飛なほどに恐怖心を煽る化物。

「これから……どうすりゃいいんだよ」

年甲斐も無く泣きべそをかきそうになりつつ、周囲を見渡す。

そこは子供部屋のようにだった。調度品のどれもが大人のそれよりも一回り小さい。

ここに住んでいた住民ももう既に避難したのだろうか？それにしてはなんだか整然としているようにも思える。避難するとなったらもっと乱雑な跡が残るような気もするが、それが無い。まるで人が消えてしまったかのような。

そういえば外も妙に綺麗だった。そうだ。まるで一瞬で、次の瞬間には人がパツと消え失せてしまったかのような印象もあった……。

派手にミチがいた子供部屋の窓ガラスが吹き飛んだ。

「ぐあっ」

反射的に顔を両腕で防御し、衝撃波のような突風に吹き飛ばされる。背後の壁に容赦なく叩きつけられ、数瞬、呼吸を遮断される。

肺にある空気量を上回る咳の回数と息が出来ないので、生理現象的な涙があふれてくる。

「ぐっ、ふう。はあ、はあ」

涙を拭い、窓の方を見やる。

「うわあっ」

あの怪物が居た。既に半身を部屋に侵入させている。おそらくあの強靱な腕の一振りですべてを破壊し、勉強机を両断し、本棚を粉々にしたのだ。

だがやはりあの巨体にはこの部屋の窓枠は小さすぎた。怪物は自分の侵入を拒んでいる壁を玄関同様に破壊しながら、ミチに腕を伸ばしてくる。

「くそっ、くそっ。こつち来んな」

寸でのところで凶悪な腕から逃れ、めちゃくちゃになった部屋から飛び出す。

今度は階段を二つ駆け下り、一階へ戻る。

正面には無理やりに押し広げられた玄関が見える。ドアは開いている。まだ頭上では怪物がもがいているらしい破壊音がしている。

今なら外に出られる。早く第一環区へ急がないと。それにはまず環状城塞都市間を地下で繋ぐメトロに乗る必要がある。駅は……遠くは無い。人を探してこの家まで無茶苦茶に走ってきたから、今の場所は曖昧だが。だけど開け放たれた玄関から見える街並みには勿論見覚えがある。

「大丈夫だ。大丈夫。行ける」

早鐘を打ちつづける心臓を落ち着かせるために自分にそう言い聞

かせる。ここから駅までは、普通は路面列車で十五分程度掛かる。走れば三十分位だ。とりあえず今は上でもがいてる怪物から離れられれば良い。

走ろう。死ぬ気で。

そう決めた瞬間、ミチは全速でスタートを切った。玄関を出て、右に曲がり、腕を大きく振って走る。後ろは振り向くまい。振り返れば、怪物が破壊した三階の子供部屋が見えるだろうが。今は少しでも怪物がそこでもがいて時間を食ってくれることを祈って走る。

その生死が如実に懸かったせいなのか、体が妙に軽く感じていた。息切れはしているが、まだまだ走れる。助かるような気がした。

もう、大分遠ざかったはずだ。もう大丈夫なはず。

そう思い、スピードを急激に落として背後を向く。

今日何度目の絶望だろうか。俺の予想を当然のように裏切り、白亜の怪物は家々の壁を地面のように這い走り、時には跳躍を以って反対側の商店街の建物を蹴って三角跳びを披露しながら追ってきていた。

「う、うそだろ……おい」

先ほどとは打って変わって、凄まじい疲労感がミチを襲っていた。

足に力が入らない。疲労のせいか、諦めか。ミチはその場に崩れ落ちた。

怪物が迫る。

目鼻の無い。やけに口が裂けた大きい怪物が。肌は真っ白で体毛は見当たらない。あいつに俺は無残に殺される。その光景が頭を過ぎった時だった。

「ヒスカッ」

若い女性の声でした。

そして次の瞬間には、俺に飛びかかろうとしていた怪物の顔面が爆砕し、爆煙に包まれた。

「!？」

何が起きたのか理解出来なかった。

俺が襲われる瞬間に聞こえた誰かの声。爆発する怪物。そして俺はまだ生きている。

それらから導かれる一つの答え。それは、

「助かった……?」

だがやはり体に力が入らず、立つことが出来ない。

「キミ、暮箱道で間違いは無い?」

いきなり俺の視界に入り込んできた女の子からの唐突な質問。

「え？え？」

要領を得ない俺の反応に、目の前の女の子はしゃがんで俺の瞳を覗き込んでくる。

「キミは、第七環区城塞都市住民の暮箱道、十九歳に間違いはな
いかな？」

再度同様の質問をする。多少の情報を加えて。その子は俺と同じ年かちょっと下くらいか。場違いなことに目の前の女の子がとても綺麗だと思ってしまう。

「どうなの？」

少し語尾を強くし、聞く。

「あ、はい。ま、間違いないです」

その俺の返答に満足したのか、「よし」とうなずくその女の子。そしてすっと立ち上がると、俺に手を伸ばしてくる。俺はその華奢で女の子らしい繊細な手を反射的に取り、立ち上がる。

ほんの数秒間、俺は目の前に居る女の子を観察した。

俺より背は低い。百六十センチ前後。どこか騎士風の、赤を基調とした、これは制服だろうか。所々に身を守る金属製のプレートが備え付けられている。そして指先から肘を覆うこれまた鈍く光る金属製のグローブ。かなりしっかりとした防具のようだ。

だが、にも関わらず視線を下に落とせば膝上のミニスカートなの

は何故なのか。いちおう膝下まであるブーツは履いているが、膝から太ももが剥き出しだ。

再び視線を上へ。

やっぱり整った顔立ちをしている。暗灰色の髪は肩口よりも長い。艶やかな綺麗な髪だった。瞳は紫水晶色で恐ろしく澄んでいる。その瞳が俺をジッと見つめている。

なんだろ？

「観察は終わったかな？」

「あつ、いや、その」

俺が彼女の容姿を事細かに観察していたことがばれていたようだ。しかもそれが終わるまで待っていたとは。一気に顔に血が集まり、紅潮する。

「わたしの名前はヒスカ。キミを助けに来たの。歩ける？」

「は、はい。大丈夫です」

ヒスカと名乗った女の子。この子が救助部隊の人なのか？と一瞬信じられなかった。もっとこうごつい人、というかもっと大人数で来るものだと思っていた。

そんな事を考えているとある物が目に入った。それはヒスカが右肩に下げている巨大な円筒形の黒い筒だ。

俺の視線がその筒に行っているのを悟ったのか、「ああ。これ？」とヒスカは黒い筒を揺すって見せた。

「これはわたしが愛用している大銃よ。ほらさっきキミを襲おうとしていた怪物を撃つたのはこの子」

武器をこの子と呼ぶヒスカは自慢気にその大銃とやらを俺に見せる。

その時だった。背後から再び女性の声が掛かった。

それも今俺の目の前に居るヒスカとよく似た声だ。

「ヒスカーっ。後ろ後ろ」

ヒスカが放った大銃で死んだかと思われていたあの怪物がのっそりと起き上がっていたのだ。

「うわ。しぶといやつ」

ヒスカは余裕すら感じられる悪態を吐きつつ、例の大銃を構える。ターゲットの白い怪物は大銃の初撃が効いていたのか動きは緩慢だった。おまけに上あごから頭頂部にかけて派手な裂傷が伺える。致命傷にも見えるが、それでも怪物は俺とヒスカに襲いかかろうと右腕を振りかぶっている。

ヒスカは大銃を構える。ついさっき怪物の周囲三メートルを爆炎で覆った凶悪な大銃をこの至近距離で。

大丈夫なのか？大銃を構える当の本人は涼しい顔をしているが。

ここで撃つたら怪物もろとも俺たちも黒焦げになりそうな気がする。

「ダメー。ヒスカっ。あたしが殺るから。ミチ君も死んじゃう」
えらい物騒なセリフを背中に聞きつつ、俺は事の成り行きを見守る他無かった。

怪物の巨腕が振り下ろされるマジ三秒前。

俺とヒスカの脇を一つの影が駆け抜けた。

またしても女の子だ。ヒスカとまったく同じ騎士風の格好。またヒスカと同じ暗灰色の髪をポニーテールに纏め、おそらく背丈も同じくらい。

「下がってて」

一言俺たちに向けて放った言葉の声はヒスカとまったく同じ。

「双子？」

「そ。わたしとヒスカは双子」

俺の疑問にヒスカはやっぱり涼しい顔で答える。

一方、ヒスカは両腰に一本ずつ下げていた直刀を腕をクロスさせて一瞬で引き抜くと、怪物の振り上げられていた右腕を一閃した。二本の直刀を重ねて放った一撃は、物の見事に怪物の巨腕を切り落とした。

ちよつとした地鳴りを上げて主の体を離れた腕が落ちる。

そしてシスカは鮮やかな着地を決めると、すかさず振り向きそのままの勢いで、怪物の腕に放った一撃と同様のものを頭に加えた。問答無用でこそげ落とされる怪物の頭部。怪物は首から赤い鮮血の噴水をしばらく披露してから絶命した。

「仕事を終えたといったような様子で俺とヒスカの元へと来るシスカ。」

「始めまして。ミチくん。あたしはシスカ。ヒスカの妹だよ。二人でミチくんを助けに来たの。これからしばらくよろしくね」

「ど、どつも」

俺はぺこりと頭を下げる。

どつやら俺はこのヒスカとシスカの双子の姉妹に命を救われたよ
うだ。

第2章 脱出の理由

ヒスカが先頭。シスカはミチの背後にぴったりと付いて、駅を指し歩いている。

「あの一。俺は第一環区に行きたいんですけど……」

ヒスカが先導し、向かっている方向は第一環区と繋がるメトロがある駅とは逆の方向だった。

「わたし達は第十三環区へ行きたいの」

きっぱりと言うヒスカ。何故俺が第一環区へ行きたいのかの理由も聞きやしない。助けてもらった以上は強くは言いにくいのだが。

「どうして第一環区に行きたいの？」

そんなミチの様子を見かねたのか、はたまた単に興味を持っただけなのか。とりあえず今のミチにとっては助け舟的な発言をしたのはシスカだ。

「姉貴がそこに居るかもしれないんだ。姉貴は第十環区の友達ん家に泊まってたんだけど、さっきの怪物が現れたせいで避難したみたいなんだ」

「どうだろ。たぶん第一環区もあの怪物で溢れ返ってると思うよ？ 生存者はもう居ないと思うけど」

シスカはわざとらしく唸ってみせる。

「そんな。だって第一環区はこの環状城塞都市群の中枢だし、軍の施設もあるからそんな簡単には……」

「あの化物相手に通常兵器は通用しないから」

落ち着いた、妙に冷静な口調で先頭を歩くヒスカは口を開いた。

「でもほら、その、ヒスカさんやシスカさんが持つてる武器は簡単にあの怪物を倒してたじゃないですか」

「それはわたし達が扱う武器は外界の代物だもの。この環状都市群には存在しないわ。もちろん軍にもね」

は？と思った。外界で作られた？じゃあ、……。

「じゃあ、もしかしてヒスカさん達って、外界そとから来たんですか？」

「そうだよ」

ミチの問いにシスカが答える。

瞬間、頭が混乱する。小さい頃から人が生きていける世界はここ環状城塞都市群だけだと教えられて生きてきた。この街を囲う環状の城壁の向こうには災厄が満ち満ちて、とても人が生きていける環境ではないのだと、教えられてきた。

なら、俺の目の前に居るヒスカとシスカは何だ？この二人が外界そとから来た？あり得ない。でも嘘を言っているようにはとてもじゃないが見えない。なら……。

ミチが適当な疑問を口にしようとしたが、それよりも早く真実を突きつけてきたのはヒスカだった。くるりと身を後方へ向け、ミチに向き合う。

「これが証拠」

ヒスカはそう言って右肩に背負っている黒い筒を見せてくる。それはヒスカの身の丈近くの大きさをほこり、直径に至ってはヒスカのウエストを遥かに上回っている。それを彼女は涼しい顔で担いでいる。

俺がああ怪物に襲われる寸でのところで、怪物を撃ちぬいた巨大な武器。たしか大銃おおづつといったか。

「こんな武器、環状都市群こで見たことはある？」

端的な回答を言えば、ノーだ。だけど俺はもちろん軍の人間じゃないからそうそう本物の武器を見る機会は無いから、はつきりとは言えないが。

「この大銃やヒスカが腰に差している二本の剣も、外界で己の身を守るために作られた武器よ。まあそういう意味では、街を囲んで人々を守っている環状城壁もこの武器も同じかもね」

「それじゃあ、ヒスカさんやヒスカさんはこれまで外界そとで生きてきたってことですか？」

ミチは半ば放心状態でその疑問を口にする。

「そうよ。まあ、世界がこの環状都市群が全てだったあなたには信じられない話でしょうけど」

ヒスカは当然のように言っているが、ミチは頭蓋をかち割られたかのような衝撃を受けていた。よって完全に放心するミチ。

「ちょっと、大丈夫？ミチくん。もうヒスカったら、いきなり本当の事を話しちゃったらミチくんが混乱しちゃうじゃない。もう」

シスカは姉のヒスカに頬を膨らませて怒ってみせる。

まったく迫力は無かったが。

シスカは俺の体をゆさゆさ、時折頬をぺちぺちしながら正気に戻そうと試みている。

まあ、別に正気を失ったわけではないのだが。ただ単に事の衝撃さに半分あきれ返っていた、というのが正しい。

パツとミチの瞳に光が生還したのを確認すると、シスカは「大丈夫？」と顔を覗き込んでくる。

あ、かわいい。

そんな俺のどうでもいい感想は置いていて。

「じゃあ、ヒスカさん達は軍や政府が派遣した救助部隊ではないんですか？」

コクリとヒスカは頷いて見せる。

「じゃあ、じゃあ、これからどこへ行くんですか？」

「わたし達は今第十三環区を目指しているわ。そこに外界そとへ繋がる穴があるから」

ヒスカは例の涼しい顔をしてそう言っているが、子供の頃から外界とは魔界よりしく教えられてきた身にしてみれば、とんでもない話だ。

「やだやだやだ。俺は外界そとなんかに行かないよ？死にたくないし。それに姉貴のことを探さなくちゃならないし」

ミチは駄々をこねる子供の如く、やだ、を連発する。

「バカね。キミ。さっきあの化物に襲われたばかりじゃない。もう環状都市群こくはもう意味を為していないの分かってる？あれはもう機能していないの」

ヒスカは言つて、遙か先に見える高くそびえる壁を指差す。

それはこの第七環区を外界の災厄から守ってきた環状城壁だった。

「なんらかの原因で壁に穴が空いてしまった以上、ここも外界そとももう違いは無い。いえ、むしろ壁で囲まれたこの都市は危険なの。いくらわたし達があゝの怪物と闘えるからって相手に出来る数はそう多くは無い。追い込まれたらお終いよ。だからそうなる前にここを脱出しなくちゃならない。分かった？」

まくし立てられたミチは言葉を失い、やっとの思いで呟く。

「でも、姉貴を見捨てるわけにはいかない……」

ふう、とヒスカはため息を吐く。

「もしキミのお姉さんがキミ同様、他の住民のように簡単に死んでいなければ、わたし達のような助けが行っているはずよ」

そのヒスカの言葉はまるで、生き残っている俺が特別な存在だ、と言っているようにも聞こえた。だが、それは自意識過剰というものだろう。

「それに。キミのお姉さんが第一環区に居るとも限らないし。第十環区とは間逆の第一環区まで行くリスクは負えないわ。わたし達の使命はキミ一人をここから救い出すことなの。分かって」

でも……。「はい、分かりました」、とは言えない。たった一人の家族である姉貴を見捨てて行くわけには……。

「そういえば」

シスカが口を開いた。唐突に何かを思い出したらしい。ミチとヒスカの視線がシスカに集まる。

「そういえば、第七環区へミチくんを探しに来た途中でキャンプがあったよね？」

シスカに問われ、ヒスカも「そういえば」、とシスカ同様の口調で言った。

「あたし覚えてるよ。いっぱいテントがあって、環区ことに生存者を集めていたみたいだったけど」

ミチはそのシスカの発言に飛びついた。

「それ本当っ!?!」

シスカの両腕を掴んで凄むミチにシスカは目を見開いて「う、うん」と答える。

「確か第十一環区だったっけ?」

どうやらヒスカも記憶は曖昧なようだが心当たりがあったようだ。

「わたしはキミの居る第七環区を目指す事だけを考えていたから、
良くは覚えていないけど。でも確かにそんなような場所があったかも」

言ってヒスカもうんうんと頷く。

「ならそこへ行くことは出来ますか?」

ミチはヒスカに問う。

「うん。来た道をまた戻るつもりでは居たから」

「それじゃあ。急ぎましょう」

そう言っミチはヒスカを追い越し、先頭を早足で歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0940n/>

End,end,and.....

2010年10月8日22時48分発行